第4回「言語とアイデンティティ―コミュニティのウチとソトでの言語使用」

あべ やすし

http://hituzinosanpo.sakura.ne.jp/tagengo2019a/

コミュニティだけで通じることば

人はコミュニティをつくり、交流をふかめていく。そのうち、そのコミュニティだけで通じる表現がでてくる。コミュニティ独特の表現は、共有する人たちの間に仲間意識をうみだす。たとえば、プログレッシブロックを愛する人たちの間では、高嶋政宏（たかしま・まさひろ）は「スターレスさん」「スターレス高嶋」である。日本の「プログレ」ファンの間では高嶋がキングクリムゾンの「スターレス」という曲をカバーするほど溺愛していることが知られている。そのため、ツイッターに「きょうのキャメルのライブ、スターレスさん来てた？」などとつぶやく。

そのような現象は、どこにでも、どのコミュニティにもある。文脈を共有していなければ、理解できない会話や文章がある。文脈依存的であるため、「部外者」「門外漢」には理解できない。話題や「こだわり」を共有している人は「仲間」と認識される。

ちなみに、インターネットが普及する以前は、趣味をあつかう雑誌には「文通相手募集欄」があった。自分はなにが好きかを自己紹介し、名前、住所を公開し、趣味のあう人と交流していた。手書きで文通する時代からデジタルの時代になり、ウェブ掲示板やSNSで独自のことばづかいを共有し、結束している。人は、似たもの同士で集まるのだ（ヘファーナン2011）。

コミュニティ特有の話し方

エスニックマイノリティのコミュニティでも、特有の話し方が共有されることがよくある。その「話し方」は、「社会方言」として分類される場合もあれば、ひとつの言語として分類しうるものだと認識される場合もある。アメリカの黒人英語には、まさにコミュニティ特有の話し方がある。

黒人英語は、アメリカの世間一般では否定的にとらえられてきた。しかし、コミュニティのなかでは「あたりまえの話し方」である。そのため、コミュニティのウチとソトで、使いわけ（きりかえ）をしたりもする。そのような使いわけをコードスイッチングという。

「code switching」でYouTubeの動画を検索すると、社会言語学の理論を解説する動画だけでなく、黒人英語についての当事者のトークや動画がでてくる。

例
・TEDトーク「The Cost of Code Switching」 Chandra Arthur
・TEDトーク「Everyday Struggle: Switching Codes for Survival」 Harold Wallace III
・TEDトーク「To Code Switch or Not to Code Switch? That is the Question.」 Katelynn Duggins
・Netflix『What Had happened Was』エピソード2「Code Switching」
・HuffPost『Between The Lines』「What Is Code-Switching?」
・ノースカロライナ州立大学『The Language & Life Project』「Code-Switching」

アメリカの黒人英語については特有の文法、発音、語彙があること、「劣ったスラング」などではないことが1970年代から言語学者に指摘されてきた。黒人英語について語る動画を見てみると、アフリカ系アメリカ人のコミュニティでは黒人英語を話すこと、一方で「適切な話し方」が期待されている場においてはコードスイッチングをして、話し方をかえるといったことが語れられている。そして、アフリカ系アメリカ人のコミュニティで「外向け」の英語を話していると「白人のような話し方」（talk white）と指摘されることがあるとも語られている。

つまり、場によって期待されている話し方がことなっており、その都度、状況を見ながらコードスイッチングをしているのである。また、うまくコードスイッチングできなければ、生命の危険にかかわることも指摘されている。たんに「黒人である」というだけで警察官に嫌疑をかけられ、銃口をむけられたとき、「適切な話し方」ができたから銃殺されずにすんだという経験が語られている。

コードスイッチングという現象があまりにも日常的で身近なものであるために、「コードスイッチング」という言語学の専門用語がトークの表題にかかげられるのである。コードスイッチングという用語は、言語マイノリティにとっては「あるある」な現象であるため、理解しやすいのである。

存在証明としてのコードスイッチング

人は、相手に通じるようにコードスイッチングすることもあれば、仲間意識にもとづいてコードスイッチングすることもある。その場、その人との関係などをふまえて、自分の言語使用を管理するわけである。こうした言語行動については、石川准（いしかわ・じゅん）のアイデンティティ論が参考になる。石川は『人はなぜ認められたいのか』において、つぎのように説明している。

> 私たちが「適切に振る舞う」のは、自分が参加している社会、自分が関係を結んでいる人々の中で、自分は正しく振る舞うことのできる人間なのだということを証明しなければならないと考えているからです（いしかわ1999:20）。

そして、「なぜ」「適切に振る舞う」のかについて、つぎのように説明している。

> …私たちが「自分に対する評価」に強いこだわりを持っているからです。つまり、他者のまなざし、あるいは社会のまなざしというものへの意識や自覚が非常に強くあって、それが私たちの行動の仕方に大きな影響を与えている、ということだと思います（同上:24）。

石川は、アイデンティティという語を「私が社会の中でどのように分類されうるのかということについての自己了解であり期待」（同上:52）であると説明し、「そのアイデンティティを管理すること」を「存在証明」と呼んでいる（同上:56）。
つまり、人は所属意識をしめす言語使用をすることもあれば、「教養」があることをしめす言語使用をすることもある。「どのように話すか」が重要であるからこそ、その場その場で「話し方」を変化させ、自分のアイデンティティ（自己イメージ）を管理しているのである。

石黒圭（いしぐろ・けい）の『日本語は「空気」が決める』という本の帯には、「なぜ「自分」は、サークルでは「オレ」、ゼミでは「ぼく」、就活では「わたし」と言うのか？」とある（いしぐろ2013）。この一人称の選択はまさに、人が言語規範を意識しながら自己イメージを管理している様子なのである。

専門用語の必要性と言語の公共性

最後に、話題をかえて専門用語をめぐる論点を確認する。
不特定多数に発信する情報において、専門用語や外来語を使いすぎてしまうと、そこでのコミュニケーションから排除される人がでてくる。これまで、悪文、専門用語、外来語などについて、さまざまな問題提起がされてきた。言いかえの提案もある。しかし一方では、理由があって使用されている語彙をむやみに制限することは困難であるという議論もある。
たとえば学術研究の場における言語表現について考えてみよう。たとえば、厳密で適切な表現をもとめて「まわりくどい」ような表現をとることもある。一方で、ことば数（字数）を省略するために、略語を多用することもある。たとえば、日本語教育研究の領域では、「外国とつながるのある子ども」であるとか「JSL児童」といった用語が当然のように使用されている。ここでの「JSL」とは、「第二言語としての日本語（Japanese as a Second Language）」という意味である。しかし、日本語教育の外部では、JSLを日本手話の意味で使用する場合がある。ここでのJSLは「Japanese Sign Language」の略語である。

専門用語は、最初は理解できずにいても、そのコミュニティに参加するうちに身につけていくものである。そのため、とおりすがりの「門外漢」にとっては、そのコミュニティは排他的に感じられる。一方で、身につけてしまった人にとっては、あたりまえの表現でしかない。専門用語をつかわずに論点を整理してものごとを論じると、わかりやすいと評価をうける。しかし、専門用語は、窓／入口でもある。それぞれの用語を理解すれば、これまでの議論（先行研究）にア

クセスできる。検索することもできる。その語を使用することで、注目をあつめることができる。ここに、言語の求心性と排他性がある。
　ひとつひとつの用語は、難しく見えるとしても、その用語を使うことでつながりができる。専門用語の使用は、旗をたてるようなものである。自分がその分野に通じていることを証明する手段でもある。しかし一方で、専門用語がハードルになって「入門」をさまたげてしまうこともある。

　学術の世界ではなく、公共の場ではどうだろうか。医療や法曹界（法律をあつかうプロの世界）には、たくさんの専門用語がある。それぞれ、厳密さ、正確さが必要とされるために存在するものである。しかし、医療も法律も、だれもがアクセスできるものでなければならない。わかりやすく説明をうける権利がある。言語、情報の公共性という意識が高まるにつれて、専門用語について再検討することがもとめられるようになった。
　相手や状況に応じて適切に話すできるかどうかということは、さまざまな専門職や公務員などにとっても重要な課題になっているといえるだろう。そのような配慮については、「コミュニケーション調整理論（Communication Accommodation Theory、アコモデーション理論）」という専門用語がある。

参考文献

アンダーソン、ベネディクト（白石隆／白石さや訳） 2007 『定本 想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早川（原著の初版は1983年）
石川准（いしかわ・じゅん） 1999 『人はなぜ認められたいのか―アイデンティティ依存の社会学』旬報社
石黒圭（いしぐろ・けい） 2013 『日本語は「空気」が決める―社会言語学入門』光文社新書
木部暢子（きべ・のぶこ）編 2019 『明解方言学辞典』三省堂
斉藤純男（さいとう・よしお）ほか編 2015 『明解言語学辞典』三省堂
酒井直樹（さかい・なおき） 2015 『死産される日本語・日本人』講談社学術文庫（初出は1996年）
白井恭弘（しらい・やすひろ） 2013 『ことばの力学―応用言語学への招待』岩波新書
田中春美（たなか・はるみ）／田中幸子（たなか・さちこ）編 2015 『よくわかる社会言語学』ミネルヴァ書房
ヘファーナン、マーガレット（仁木めぐみ訳） 2011 『見て見ぬふりをする社会』河出書房新社
マッカーサー、トム（牧野武彦監訳） 2009 『英語系諸言語』三省堂（原著は1998年）
ロメイン、スザーン（土田滋／髙橋留美訳） 1997 『社会のなかの言語―現代社会言語学入門』三省堂

学生のコメント

県大にいる韓国人学部生の方は日本語でTwitterに呟きますが、いつもわかちがきで、タイムラインに流れてくると不思議なかんじがします。それが逆に日本語を母語としない人の感覚がわかったようでおもしろいです。もし自分が韓国語を学ぶときはわかち書きがわかりやすく感じるのかもしれません。

———

「Leiche Sprache」で検索すると、簡単なドイツ語を広めようとする協会のホームページが見つかった。そのホームページには「簡単な言葉のルール」が掲載されていて、①知られている言葉でなければならない ②文章は短くてシンプル ③写真や絵を用いる ④すべてのテキストが簡単なドイツ語になっているかチェックされていること、とあった。どの言語も「簡単にする」という方法は一緒なのだと思った。

———

…④試し読み（例 障害を持っている人）という規定があった。この試し読みに関して、読みやすいことばを必要とする当事者がそれを読むのは非常に意味があると感じた。試しにドイツ語の文を読んでみたのだが、“Öffentlicher Nahverkehr（公共交通機関）”という表記を“Bus und Bahn（バスと電車）”と表記していた。このように変えるのなら、もしかしたら非ドイツ語話者も意味を推測しながら読めるのか…と思った。

———

自分が持っているドイツ語の電子辞書には初心者でも単語の音がわかるように単語のあとに音が表記されている。ただそれは英語の辞書とは違い音声記号は使われておらず、カタカナで表記されている。だからたまにそのカタカナを読んだだけでは伝わらないのですが、なぜこのドイツ語の辞書はカタカナを採用したのだと思われますか。

【あべのコメント：読者への配慮でしょう。IPA（国際音声記号）は読者に難しいかもしれないという判断。あるいは、ドイツ語の発音をあらわすためのIPAのフォントを混在させることのコスト、技術的な問題。】

———

…私の祖父はパソコンを使用しますが、ローマ字入力ではなく、キーボードの右下の方に書かれているひらがなで入力をします。ローマ字というのは比較的新しい日本語の表現方法なのか気になりました。

———

点6こだけで表現できる点字はすごいと思った。別に点にしなくても、文字をすべて立体的にしたら目が見えなくても手でわかるんじゃないかなと思った。…中略…言葉のバリアフリーはマンガなどにもあると思う。大体ふりがながついているのでむずかしい漢字があっても、だれでも読める。

【あべのコメント：むかし、オプタコンという機械がありました。平面の文字を立体的に浮き上がらせるものです。
最近のエレベーターで数字が立体的になっているものがあります。数字くらいなら、役に立つのですが、文章を読むとなると、あまりにも無理が大きい。6点点字が世界で使用されているのは、それなりの合理性、使いやすさがあるからでしょう。世界で使用されているというのは、その言語にあわせた表現システムでということです。
公共図書館のなかには、マンガのわかりやすさを評価し、積極的に収集している場合があります。】

———

日本語は同じ漢字でも複数の読み方を持つ漢字が多いから、外国人が勉強するのにとても難しいと思った。日本人でも読めない漢字もたくさんあり、全ての人に分かりやすくすることも簡単ではないと思う。ルビを振ろうと思っても、全ての文字につけると逆に読みにくくなってしまう。文字というのは、多くの人に伝えたり、共有するための手段であるから、どんな人も分け隔てなく書いてある内容を理解できるようにあるべきだと思う。

【あべのコメント：山本有三の主張は、まさにそういうことでした。むかしは文字でことば遊びすることが、かなりありました。バケツという英語からの外来語を「馬穴」と書くような（夏目漱石）。漢字で表記する必要があるのかどうかを検討したうえで、漢字で書いたものにふりがなをつけるのがスジだと思います。「出来ます」「下さい」「面白い」などの漢字表記は、意味理解の助けになるわけでもない。】

———

…ルビは一体誰のためにあるものなのでしょうか。子どもたち、漢字がわからない人（外国人など）が必要とするものですよね。そうであれば漢字を読める人が「見にくい」と言うのは我まんすべきだと思います。「当事者につたわることば」ということですが、どうしても政府や行政が出す公的な文書はお堅い表現になりがちですよね。もっとわかりやすく書かないと外国にルーツを持つ人はわからないのではないでしょうか。…後略…

【あべのコメント：多言語対応でも、どういうふうに「おりあいをつける」のがいいか、議論がありますね。大事な論点です。ディスレクシア（読字障害）の人のなかには、文字がゆがんだように見えてしまう人がいて、その場合、ふりがなが障害になるとのことです（参考『読み書き障害のある子どもへのサポートQ&A』）。公的文書については、『読み手に伝わる公用文―〈やさしい日本語〉の視点から』が参考になります。】

———

キーボードのタイピングが苦手でいつもレポートの作成などに手間どってしまう。そのため携帯を使って文章を作成しそれをコピーアンドペーストしてレポートを作っている。何かキーボードにも革新的な変化があればいいと思う。

【あべのコメント：自分にあったキーボードをさがしてみることをおすすめします。うちやすいキーボードであれば、確実にキーボードのほうが早くうてるようになります。慣れてしまえば。あとは音声認識で入力するとか。】

———

私は『glee』が大好きだったので、授業中に流れたシーンもよく覚えていました。他にも確か、アイルランドから来た子がなまりをバカにされる場面があった気がします。色んな国で、方言はそのような対象になってしまっているのでしょうか。標準語とか正統派が確かに1番スッキリしていたり、聞きとりやすいのかもしれないけど、1番優れていて、正しいというわけではないから、様々な方言をもつ人々が居心地悪く感じないようにする必要があると考えます。…中略…方言と文字に関連して、方言の予測変換の備わったスマホがほしいな〜と思っています。書いとかんとかんって言ったやん としたくても→カイトカント感って言ったやん こまめに変換しながら打てばいい話かもしれませんが…

【あべのコメント：消費者側の意識、開発側のやる気、技術面次第でしょうね。／「スッキリしている」とか、「聞きとりやすい」というのは相対的な話で、自分がどのバリエーションに慣れているかによるでしょう。】

———

台湾のルビについて。台湾人の友人は、iPhoneのキーボードで文字を入力する際に、ルビを使っていました。私は中国語を入力する時は、ピンインをアルファベットで入力して、漢字に変換しますが、友人曰く、ルビの方が覚えてしまえば、入力しやすい、らしいです。小学校の同級生に、文字を書いたり、声で伝わるように言葉を話すのが難しい子がいました。彼は、タイプライターのようなもので、自分で文字を打ち、音声が読み上げる機械（名前がわかりません）を使ってコミュニケーションをしていました。…後略…

【あべのコメント：台湾のは注音符号といいます。台湾のこどもは、あれで文字の学習をします。ピンインは、たしかに文字数が多くなるので。「中」が「zhong」（注音符号だと「ㄓㄨㄥ」で3文字）。／トーキングエイドでしょうね。】

———

NHKの教育テレビの「手話ニュース」だと、手話の他に、字幕にルビがついていて障害者に対して配慮がある。…後略…

———

私は日本に住む外国にルーツを持つ人々に関心があり、今後の研究対象としようと思っています。そのような中で参考文献を見ていた際、ある専門家のアンケートによると、ローマ字よりも平仮名の方が理解しやすい、わかりやすいと答える人が圧倒的に多かったそうです。日本にいるマジョリティとして勝手なイメージや思いこみがこの結果に驚くことにつながっていると思いました。

———

…ローマ字というと私たち日本人は、何となくアルファベットだから外国人もわかりやすいとか読みやすいと思いがちであるが、ローマ字というのは日本特有な表現のため、逆にわかりにくいらしい。逆に、日本に来たばかりの留学生は平仮名ふりがなの方がわかりやすいと言っていて、日本人の私には驚きを隠せず、びっくりした。

【あべのコメント：「外国人」というのがおおざっぱすぎですね。ローマ字がいいという人もいます。どれだけ日本語を学習してきたか、どの文字で学習したかによるでしょう。想定がはずれると、それまでの想定を全否定してしまいがちですが、判断を早まらないほうがいいです。なにごとも。】

———

…タイプライターが日本で発達しなかった件について点字のようにタイプライターで打たれた文字は平仮名だけといった文化が生まれず、3種類の文字が使えるように発展したことに、墨字のこだわりが強いのかなと感じます。

———

日本語には漢字、ひらがな、カタカナ（墨字だと）があるが、ひらがなはとても便利なのでもっと普及したらいいのになと思っている。もちろん「やさしい日本語」によって、漢字が読み書きできない外国人が理解しやすくなる。だが日本人の私も漢字で困る場面がある。それは領収書を書くときだ。私が働いているレストランでは、領収書を渡す際、店員の手書きで名前を書いてからでないと渡すことができない。だから、名前をきいて、私が手書きで書くのだが、漢字が書くことができず、時間をとってしまうことが多々あるのだ。一度ちがう紙に書いてもらってそれを領収書にうつすこともあるのだが、もし外国人の店員がいて、うつすこともできなかったら、大変面倒なことになると思う。だから、領収書の名前をひらがなで書いてもいいことにしてほしい…。

【あべのコメント：わたしはパスポートの署名欄を「あべ・やすし」と書きましたが、登録するときに、「ひらがなで書くのは漢字が書けないこどもを想定したもので…。クレジットカードのサインもひらがなですか？」などと聞かれました。どうしても、「漢字表記が正式」という意識が強いですね。】

———

日本語のタイプライターやワープロができていなかったら…という話をきいて、小・中学生の時、海外に住んでいたのですが、当時はスマートフォンはまだ無く、携帯電話に日本語の機能はなかったので、ローマ字で親や友達にショートメールをおくっていたことを思い出しました。今はほとんど覚えていないのですが、できるだけ少ない文字数で（文字数が多いとその分お金がかかるため）、いかにわかりやすく書くかということを意識していました。読みやすくするためにどこでスペースをあけるか考えたり、英語で書いたほうがつたわりやすいと判断した単語は英語で書いたりしていました。その後、スマートフォンが出現し、自分も、親や友だちもスマホを持つようになり、海外にいても日本語設定の携帯電話で、日本語（ひらがな、カタカナ、漢字）でやりとりができるようになった時は感動しました。…後略…

【あべのコメント：海外にいるときなど、ローマ字しか入力できない環境にいるときに、ローマ字で日本語を書くという選択肢もあるのに、英語で書く人がけっこういました。それも、結局、漢字かなまじり文へのこだわりがあればこそですよね。ローマ字では日本語は書けないという意識がある。】

———

…テレビドラマで和文タイプライターを見たことがありますが、膨大な漢字の中から打ちたい文字を見つけだすのは本当に大変そうでした。…中略…今ではやさしい日本語がありますが、一昔前には「外国人向けの日本語」、実際の日本語とは異なる言語を作ろうという運動があったというのを別の授業でききました。…後略…

【あべのコメント：NHKの『とと姉ちゃん』でしょうか。そういう内容なら見ておけばよかったです。／「簡約日本語」ですね。運動というよりは、提案、議論。】

———

私は新聞の見にくさについて思うところがある。あれほど大きい紙面（大きすぎて持ちにくい）を使いながら肝心の文字は小さく、さらに縦書きを細かく切って横に並べているため読みにくい。使われている言葉も難解な熟語や専門用語をしきつめている。このような観点からすると新聞は非常にやさしくない情報伝達媒体である。多様、詳細な内容を限られたスペースで書く必要があるため、しょうがないとも言えるが、やはり「伝わる」ということに重点をおくことがより広い世代での情報の格差を狭めることができるだろう。

———

…私たちの周りには今、様々な契約が存在している。その中でも、インターネットサイトの会員登録の契約はとびきり文章が長い。個人情報の取り扱いなど多岐にわたるその文章は、実はインターネットの専門的な知識を持つ人でないと理解することができないほど高度な文章らしい。私たち一般ユーザーにも分かりやすくことばの民主化がされるべきだと思う。

【あべのコメント：「消費者の権利」という概念があります。契約者にとって理解しにくい文書は、消費者の権利を軽んじているといえます。契約文書のわかりやすさについて、消費者は、しつこく要求していいはずです。】

———

ことばに関する仕事に女性がつくことが多かった、というのは確かに、と思う。今、日本語教師の勉強をしているが、日本語教師は圧倒的に女性が多いときく。そのため日本語学習者は柔らかい話し方になりやすい、と日本語教師の先生が言っていた。また、スペインに留学に行った際、語学学校の先生たちは女性ばかりで男性の先生とは一度も会わなかった。この傾向は面白いな、と思う。

———

…どうしてことばに関する職業には女性がつくことが多かったんですか？ 映画のタイピストのイメージだと可愛らしい感じという印象の職業ですが…。通訳さんも確かに女性が多い気がします。…後略…

【あべのコメント：これまでの文化は、女性を「補佐的」な位置におきたがる傾向がありましたよね。秘書とか。ことばに関する職業のなかでも、補佐的な位置づけの職業に女性がつく傾向があったといえるでしょう。新聞記者も、「ことばをあつかう職業」ですが、補佐的な業務ではなく、自身でことばをつむぐものであるため、男性中心社会においては、「新聞記者は男性の職業」と位置づけられてきたのではないでしょうか。】

———

私がオーストラリアに留学していたときに、ホストマザーやホストファザーが話す英語はとても聞きとりやすく理解できたが、ホストファミリーの小さい子どもやお店の店員さんが話す英語はなかなか聞き取れなかった。これも「やさしい日本語」のような「Plain English」を使ってくれているかいないかの違いなのだろうと感じた。ホストマザーやホストファザーは私の英語のレベルに合わせようとしてくれたのに対し、小さい子どもは「Plain English」を使おうというところまで考えが至らず、店員さんは私が英語を流ちょうに話せると思い込み、ネイティブの人に話すのと同じように話すのではないかと私は考えた。

【あべのコメント：フォリナートークは、それなりのスキルが必要です。だれでもできるわけではない。日本語での対応でも同じで、通じやすく話せる人もいますが、うまくできない人も多い。文脈を共有していないと理解できない語があるときに、ことばを補足するとか、キーワードをはっきり発音するなど、そういうことに気がまわるかどうか。】

———

…活字、ワープロなどの技術革新は、見やすい文書をうみだし、文書をかきやすくしたけれど、それと同時に、私たちの読み書きの能力の低下をもたらしたと思います。

【あべのコメント：そうではなくて、結局、必要とされる能力というものは時代ごとにちがうというだけです。肉筆だけしていれば、漢字の形はよく覚えていられるかもしれませんが、文書の生産能力という意味では、完全に貧弱になります。たくさん読み書きできれば、文章力もつく。一方で、娯楽や情報の選択肢がふえて、読書という行為にあまり集中できなくなったとはいえると思います。わたしは、そうです。読書したいと思えない。腰をすえて本が読めない。】